

『政争』

リュイーズとボルメリアが揃って最初に訪れたのはヤニース家の都城トリスだ。ヤニースという一門が『天使王国』全盛時代より戦いに秀でた一族であるせいか、都と言いながらも華やかさはない。全てにおいて機能が優先され、装飾というものがほとんどない。ヤニースの家紋である『火を吹く狼』だけが、素気ないトリスを飾る唯一のものだ。

一族で十一カ国の領国を支配するのは、七大公の末裔の中でも最多だ。それだけに気位も『宰相大公』を名乗るフォリヴァス家に対する対抗意識も強い。強硬な反主流派と言える。

どうやらフォリヴァス当主の腹心であるらしいリュイーズが、わざわざ風当たりの強いヤニース家を最初に訪れたのは只単に地理的な理由でしかなかった。トリスは七列強の都城の中で一番ケルマディクに近かった。

「ヤニース家家宰タイガス様にお取次ぎ願いたい。」

私はフォリヴァス家より特使として参ったリュイーズ・ポントワと申すもの。こちらはボルメリア・ランキン卿です」リュイーズの掲げたフォリヴァス家の三匹の鱒をあしらった委任状を完全武装の門番が食い入るように見つめる。

「書状には確かにフォリヴァス家の印証とご当主カルス殿の署名がある。だがフォリヴァスに仕えるものでポントワという騎士は聞いた事がない」

武門を誇るヤニース家は居城の門番への教育も行き届いているらしい。

紋章官なみの知識を要求されているのか、リュイーズが騎士身分でないことを見破ると取り次ぐ事さえしよとなかった。

だが毎度のことであるのか、リュイーズは苛立ちも落胆もせずに食い下がった。

「なるほど、私は騎士ではありません。しかし宰相大公閣下の委任状を受け、目付けとしてボルメリア卿を同道しております。貴公らも『城岩落し』の名は聞いておられるでしょう」

言われて門番は改めてボルメリアを見る。リュイーズも歳若い娘でしかないがボルメリアときたら、その彼女よりも更に若い。まるつきりの小娘でしかなかった。しかしその瞳はいかなる戦士よりも深く落ち着いている。

湖水の底を思わせる青い瞳は、何の動揺もなく門番たちの視線を受け止めた。

「金髪青眼の小娘で大剣を持ち、浮遊盾で身を守る・・・盾がないな」

門番は噂に聞くボルメリアの容姿を呟き、彼女の周りで浮かんでその身を守る浮遊盾がない事を指摘した。

「絶えず起動しているわけではありませんよ」

ボルメリアの言葉とともに彼女の荷物から盾が飛び出た。咄嗟に門番が身構える。それを睨むようにボルメリアは見た。武器を構えられればすぐに臨戦態勢に入る。それが『城岩落し』であった。その威圧感にさしものヤニース家の門番も怯んだ。

「本当に、こんな小娘がたった一人で城を落とすのかよ・・・」

「その城が悪きものならば」

ポルメリアは門番の呟きに淡々と答えた。その言葉に続けてここぞばかりにリュウイズが叫ぶ。

『城砦落し』は決して『悪』に加担せぬ。ポルメリア卿が同道される事こそ、我らフォリヴァスの誠意の証と心得られよ。我らが望みは『平和』である。ヤニース家の方々にもご異存ありませんまい」

言われて門番は判断に困った。リュウイズは確かにフォリヴァス家の特使なのだろうが身元確かな騎士身分ではない。『城砦落し』と名高いポルメリア・ランキンは、北方の大国ランキン侯爵の血を引くれつきとした貴族のだが、彼女は流浪の身でありその姿を本当に確認できる者がいない。追い返す事が妥当ではある。

しかし万一本物であるならば、フォリヴァス家の特使をヤニース家が門前払いした事になり、外交上はなほだ好ましくない。

だがリュウイズの叫び声が門番達にとって救いの神を呼び込んだ。

お待ちあれ、という声とともに現れたのは身なりのよい上級騎士のようだった。

「大変失礼した。ポントワ殿、ランキン卿。私はハロルド・タイガス。家宰一門に属する者。一年前に私は『城砦落し』殿を見知っている。かような若い女騎士は他におるまい。無礼をお許しあれ、特使殿。私から家宰殿に取り次ごう。参られよ」

ヤニース家の有力家臣であるタイガス一門を名乗る上級騎士は三十代に入ったばかりだろうか。短い口髭を整え、衣服も艶やか。麦色の頭髮もきちんと手入れが行き届いている。ハロルド・タイガスは愛想笑いさえ浮かべて二人を先導した。

しかし、若い娘二人の方は打ち解けた様子もなく、躊躇いがちに道を空けた門番を威嚇するように見ながら城門を潜った。

「知り合いですか？」

リュウイズがやや腰をかがめてポルメリアの耳元で囁く。ポルメリアは前を歩くハロルドから注意を逸らさずに答えた。

「それほどではない。ただ、一年前に彼の兄を殺したというだけです」

『城砦落し』に殺されるほどの悪党だったということですか？

「ヤニース勢がイルーク、キスラングの領国を略奪騎行した事があった。

彼の兄は情け容赦なく村人を殺し女を陵辱し、奴隷として連れて行けない子供や老人を惨殺した。

収穫前の畑を焼き払い、人々に飢えと病をもたらした。戦の習いとはいえ、見過せない」

「ハロルド・タイガスもその騎行に参加していた可能性がありますね」

「おそらく。このように声をかけてきたからには何か企んでいるかも知れない。貴女を巻き込む事になるかも」

「それは、貴女に同道願った時から抱えているリスクですよ、『城砦落し』」

ヤニース家家宰のスルト・タイガスは男爵位を持つ老人だった。

先代ヤニース家当主の代からその役職についている。

鼻眼鏡をかけた、脳天が禿げ上がりその周りの白髪を長く伸ばした老人は、書状を一読してから鷹の様な鋭い視線をフォリヴァス家が寄越した二人の娘に投げかけた。

「ムラード様を殺した犯人を、わざわざフォリヴァス家が探して下さると？ご苦勞な事だな」

スルト老人の言葉には温かみはなかった。しかし拒絶した訳でもなかった。

「ムラード様が亡くなられて一番不利益を被っているのが、ヤニース家を除けばフォリヴァスである事は承知している。しかし我らがフォリヴァス家に友好的であらねばならない理由は何処にもない。ましてや、その『城砦落し』は我が一族の仇でもある。協力する言われはないな。」

だが追い返して痛くもない腹を探られるのはご免だ。

ムラード様が亡くなられた部屋と、そしてムラード様付きの家臣たちを調べる事は許そう。だが今日一日のみだ。それ以上滞在すれば、そなた達の無事を保証しかねる。特に貞操のな」

スルトはにこりともせずそう言う人々に命じられた手つきで下がるよう促した。

二人には何の言葉も喋らせない。それ以上付き合う気がないという素振りで本来の仕事に戻ってしまった。

相変わらずハロルド・タイガスはにこやかな笑みを浮かべて二人を案内する。だが話す言葉は辛辣だった。

「フォリヴァス家はあざといな」

「おっしゃる意味が解りませんが」

リュイーズは無表情で返す。ハロルドも上辺はにこやかなままだ。

「本来名の知れた有力家臣を差し向けるべきところを、君のような若い、平民の娘を奇越す。

我々が受け入れればよし。拒絶すればフォリヴァスはヤニースに一つ貸しを取れる。」

『フォリヴァスの平和への努力は、氣位の高いヤニースの受け入れるところではなかった』と諸侯に宣伝できるわけだ。その上、我らタイガスの仇である『城砦落し』まで連れて。

「本当は、君達は生贄なのではないかね？」

突然振り返ったハロルドはにこやかなままだったが、その瞳は笑っていないかった。

ここにも上辺でしか笑わない人間がいる。

ポルメリアは密かに溜め息をついた。

リュイーズは、しかし怯む事なく礼をする。

「何をおっしゃるかと思えば。寸鉄の武器すら帯びない私を差し向けました宰相大公閣下のお志をお汲み取りくださいませ。

ポルメリア卿も我らの公正の証としてお連れしましただけのこと。作為はありませぬ。

ポルメリア卿とタイガスの方々との不幸は、今始めて知りました。大義の為に私情を堪えていただき、感謝に耐えませぬ」

「本当にそう考えているのかね・・・」

ハロルド・タイガスが腕を振り上げようとする。それを制するようにポルメリアはハロルドを睨んだ。

その鋭い威圧感の前にハロルドの腕は止まった。

彼は自分の兄の末路を思い出したのかも知れない。彼の兄は五百人の精鋭を率いていた。

タイガス家子飼いの古強者ばかりだ。だが誰一人無傷ではすまなかった。名のある騎士は全て粉砕された。

斬られたのではない。鈍器のようなもので鎧ごと砕かれたのだ。兵士たちも半分は落命した。

あとの半分は生き残ったが、全て足や腕を失い、二度と戦場に立てぬ体にされた。

それをやってのけたのは目の前の少女、たった一人なのだ。ハロルドは自分が完璧な演技をしたと思っていた。

彼の合図で用意した狙撃手は少女を正確に射抜く筈だった。その罫を見破られてしまったのか？

ポルメリアの清冽な青い瞳に怯えて彼は怯んだ。

だが部下の手前、上げかけた手を元に戻す訳にはいかなかった。自分が怯えて絶好の機会を逃したとなれば、今後部下はハロルドの命令に従わなくなる。

彼は思い切って腕を挙げ、そして下ろした。彼の命の問題ではない。

家の仇を目の前にながら何もできない臆病者と見られることこそ問題なのだ。タイガス家の名誉の問題なのだ。

合図と同時に城の胸壁の上で何かが光った。武器さえあれば飛来する二つの矢を叩き落す事は不可能ではない。

しかし武器を収めて他人の城へ入る事が客人の礼儀だ。

一つは避けれる。しかしもう一つは無理だ。ポルメリアはそれを覚悟した。

だが、彼女の目の前で黒い影が揺れた。そして次の瞬間に風を切る音が響いて、卿壁の上で二つうめき声が出た。

ポルメリアの前に立っているのはリュイーズだった。素手のままの彼女だった。

そしてハロルドは、もはや上辺だけの笑みさえ浮かべることができなくなっていた。

「なんだ・・・今は・・・」

リュイーズは何事もなかったように答えた。

「ちょっとした曲芸ですよ、騎士殿。」

しかし、一度目は冗談でしょうが、重ねての無礼を受けては、私もポルメリア卿も考えなければなりません。

ポルメリア卿の腕前は、タイガス殿の方が私よりもご存知かと思いますが」

ハロルド・タイガスは周囲に目を向けた。ポルメリアも彼が視線を投げた辺りを窺う。

三人を囲むようにして武装兵の様子を見ているのは明らかだった。

しかしざっと見渡した限り、城や塔を一人で陥落させるポルメリアが警戒するような使い手はいないように見えた。尚武を看板しているヤニース家でも、彼女のような存在は稀有なのだろう。

ハロルド・タイガスにしてもリュイーズの腕前に驚愕して度肝を抜かれている有様だ。

部下に攻撃させるにしても自分あまりにも二人の娘に近すぎる事が懸念されるのだろう。

彼は生唾を飲み込むより他なかった。

「逸った部下の非礼は詫びる。許して欲しい。ご覧の通り私は武器を鞘に収めたままだ。それを私の誠意と思って欲しい」

リュイーズが半歩下がってポルメリアを見る。ポルメリアは問題ないというようになづいた。

リュイーズは落ち着き払ったまま宣告した。

「ハロルド殿の詫びを受け入れましょう。私たちも争いに来た訳ではありません。」

ムラード・ヤニースさまを殺害した犯人を探し出し、法の裁きを受けさせ、諸侯の平和を守る事こそ、我らがフォリヴァスの望み。

ヤニース家の方々のお望みにも治うものと存じます。どうか我が主の寸志、ご理解いただきたい」

ハロルド・タイガスは懸命に目配せして兵達を下がらせた。武装兵たちは顔を見合わせ、そして渋々引き上げていく。

しかしボルメリアは安心しなかった。この城には敵意が満ちている。兵士達もただ姿を消しただけに過ぎない。城門を出るまで警戒を怠る事はできない。彼女はそれを肝に銘じた。

笑みも消え失せた青白い顔でハロルドが案内したのは、ムラード・ヤニース殺害現場である彼の居室だった。三十を越えて未婚の彼には、当然ながら奥方はいない。世話は老執事と侍女が二人でしていたらしい。侍女は二人とも妙齢で可愛らしい顔立ちをしていた。二人とも昼だけでなく夜の世話もしていたかも知れない。

ムラードの居室はトリスに四つある天守、北西キープの二階にあった。窓は中庭に面している。綱を使えば昇り降りするのに難しい高さとは言えない。

ハロルドが見守る中、リュイーズはムラードの私生活全般を知っていたであろう老執事に質問した。

「ムラード閣下はどちらでお亡くなり？」

「そちらの執務室の机にうつ伏せになっておられました。

首元から血を流しておいでで、そちらの侍女・・・ウィーナが朝伺いました時には、もう既にお亡くなり・・・」

執事がウィーナと言った侍女は少し気後れしながらも物珍しそうにリュイーズとボルメリアを見ている。

おそらくヤニース領内の農民か商人の娘なのだろう。

他国者、それも少女騎士と非武装で非騎士の女使者など見た事がなかったに違いない。その上、丁寧に質問されることも。

「ウィーナさん、ムラード閣下の傷を覚えておいでですか？」

リュイーズに尋ねられてウィーナは目を白黒させた。そして何とか気を取り直して執事やハロルドの顔色を窺いながら答える。

「すみません。私、どうしていいか解らなくて悲鳴を上げて執事さんに助けを求めるばかりで、

殿様のご遺骸をじっくり見ていないのです」

「ムラード閣下の死因を調べられた医師か魔術師、僧侶は？」

リュイーズはウィーナの芳しくない答えにも気落ちせず淡々と執事に質問する。執事は首を振った。

「亡くなられているのは解りきっております。家宰殿や大公閣下の采配を仰ぎ、

我がヤニース家の守護神である軍神をお祀りしております僧侶にお弔いの手配をお願いしました」

「それではその僧侶殿に話を伺わなければなりません。お手数ですが、案内していただけますか？」

しかしリュイーズの要請は却下された。

「今、僧侶を呼びにやらせた。質問はこの部屋ですてもらおう」

ハロルドは不機嫌な様子でそう答えた。それを聞いてようやくリュイーズの顔に愛想のいい笑顔以外の表情が浮んだ。かすかな侮蔑だった。ボルメリアにしてもよくよく見て気付いたくらいだった。

この部屋にいる他の者たちがそれと悟ったどうか、解らない。

しかし特に不平を漏らす訳でもなく、

リュイーズはハロルドの言葉をあつさり承して故ムラード・ヤニースの居室の探索を始めた。

とはいってもムラードの机や椅子を調べ、それから窓までの距離を測り、

そして部屋の出入り口である重々しい扉までの距離を同様に測っていただけなのだ。

ちようどりユイーズが扉まで行ったところでそれが開いた。現れたのは厳つい、頭を丸めた、頑固そうな中年の僧侶だった。かなり高位の僧侶であるようだ。

紋章はボルメリアが崇拝する軍神と同じである。ボルメリアは丁寧に礼をした。

僧侶はそれを当然の事と言わんばかりに做岸に受けた。しかしユイーズは軽い会釈をするばかり。呼びつけられて不機嫌であった僧侶の額に青筋が浮んだ。

「ハロルド殿、これでも拙僧、忙しい身の上でしてな。急ぎのご用は何か？」

「そちらのフォリヴァスのお使者殿が御坊にお尋ねしたい事があるそうですよ」

ハロルドに水を向けられたリユイーズはにつこりと微笑んだ。

「猥下をお呼びだてして申し訳ない。」

しかしこちらから伺おうと思ったのですが、ハロルド卿に無用と言われましてね、ご足労願った次第」

言われた僧侶は怒りをこめた視線をハロルドに向けた。

ボルメリアは内心溜め息をつく。リユイーズ・ポントワはフォリヴァスの宰相大公の懐刀だけあって如才がない。そして悪意を隠さない。彼女の派遣自体がフォリヴァス家の挑発だととらえられても仕方がない。

ハロルドは弁解の言葉を言おうとしたのか口を動かしかけたが、しかし決まり悪そうに黙ったままだ。表立って言う事はできないだろう。

必要以上にフォリヴァス宰相大公の側近を自分たちの本拠トリスでうるつかせるなど、できる事なら避けたい事だ。

どうもこの軍神の僧侶、神に仕える事には熱心だが俗事に関わる事には不熱心のようなのだ。

軍神の使徒であるなら兵法も学ぶであろうに、己の自尊心を優先させる事ばかり考えているのだろうか？

ともあれ雰囲気はリユイーズの望む方向に動いていた。傲慢な僧侶は無礼な味方よりも懇懇な訪問者に良い印象を持ってしまった。おかげでリユイーズの質問にはスラスラと答えてくれる。

ムラード・ヤニースの致命傷は首元から心臓に達する刺傷で、他に傷はない。

長く争った形跡もなく一撃で即死したのだろうかという。

ムラード公子はかなりの手だれであったから、相手はよほど練達の暗殺者なのであろう。

一応傷口から毒を使った痕が見つかったが、毒など使わなくてもムラード公子は絶命していたであろう。

「私は戦場での経験が多いので。傷に関してはなかなか詳しいのでな」

「なるほど、流石は軍神の使徒。感服いたしました」

「いやいや、これもムラード閣下を暗殺した者を探し出す手立てになれば、閣下の供養にもなりましょう。戦場で亡くならずにご自分の居室で討たれるなど、武人としては無念の極みでありましょうからなあ」

僧侶は自分が喋りたい事のみを喋り続けて去っていった。他の者からみれば、うまくリユイーズの手玉に取られたようなものだ。特にハロルドは僧侶の後ろ姿を恨めしげに見送った。

なるべく探索の妨害をしると家宰にでも言われたのだろうか、お喋りな僧侶のおかげでヤニース家が知りうるムラード公子の死亡情況は全て筒抜けになってしまった。

それはリュイーズにとっても知るべき事は全て知った、という事になる。彼女は晴れやかに言った。

「方々、ご協力感謝いたします。我がフォリヴァス家は誠意を持ってムラード閣下暗殺の下手人を探し出しましょう。それこそが天使より王国支配を委ねられ、中原の平和を守らんとする宰相大公閣下のご意志であります。下手人が解り次第、いの一歩にヤニース家にご報告する事をお約束いたします。

ありがとうございます」

そういつて深々とリュイーズは礼をした。いささか芝居がかっている気がするが、これが彼女のやり方なのだろう。ポルメリアも軽く礼をし、そして二人はトリスを後にした。

丘を越え、トリスの塔に揚げられた炎を吹く狼の旗も見えなくなった頃、ポルメリアはポツリと呟いた。

「・・・本当に犯人を探すつもりなのですか」

「本気ですよ。それが私の役目です」

「それにしても、あちらを挑発しているような行動が見えましたが・・・」

「挑発しているのですよ。ヤニース家に貸しをつくる為にね。その方が後々やりやすくなる。

城が見えなくなりましたから、そろそろ挑発に耐え切れなかった者たちが城門を出たところでしょう。

あと半刻も歩けばこの道は森に差し掛かります。そこで私達を襲撃するつもりだと思いますが、宜しかったですか？」

リュイーズはこともなげにいい、大胆不敵に笑った。

ポルメリアは溜め息をついた。

「こう言うてはなんですが、誠意のある態度ではありません。貴女は自分から紛争の種をまこうとしている」

「紛争にはなりませんよ。連中を倒したところでヤニースは文句を言いますまい。

小娘二人に撃退されたなど、恥ずかしくて真つ当な騎士なら口にできる事ではありません。

そして万一私たちが殺されたところでフォリヴァスはヤニースに文句など言いませんよ。

貴女は部外者でランキン侯爵の身内とは言え孤独な放浪者。

野垂れ死にしても問題はないし、私にしたところで宰相大公の影のご用を勤める身。表沙汰になる事は決してありません」

「自分からわざわざ危険を招きよせたのですか」

危険の中に飛び込む事はしても、自分の方に手練り寄せるような真似をポルメリアはしない。

基本的に彼女は剣を振うしか能がないと自覚していても平穩無事である事を喜ぶ娘だ。

平地に波乱を起そうとするリュイーズの態度は理解できなかった。

「まあ、私だってこんな真似はしたくありませんよ。やりそこなったら私は陵辱されて惨殺されるでしょう。

貴族でもない女の、戦場での運命なんてそんなものです。しかし、それが我が主の命であるならば、それに従う。

それが私の仕事なんです」

驚いた事にリュイーズは初めてポルメリアに向けて、見せ掛けではない微笑を向けた。

苦笑でも自嘲でも諦観でもなかった。彼女は、この仕事をする事に誇りと喜びを持っているのだ。

ポルメリアは首を振った。

「解りません。身の破滅が待っているかもしれないのに、何故そんなに……」

「では逆に、貴女はどうです。皆貴女の行為を半ば呆れ半ば馬鹿にしています。たった一人で城を落とす。それも一度や二度ではない。毎月どころか二・三日に一つは落としている事もある。

悪徳城主、邪教の僧侶、人倫にもとる魔法使い。確かに皆人々を苦しめ、平和を乱す事をしている。

だが彼らを滅ぼしたところであまり世の中は変わらない。支配者を失った土地は新たな支配者を受け入れるだけ。それが以前の者に比べていいのか悪いのか、支配されてみなければ解らない。

元の木阿弥になるかも知れない事に、たった一人で命をかけて戦うなんて、私に言わせれば無謀で良く解らない行為だ」

「……それは、解っています……」

リュイーズの質問にポルメリアは力なくうなだれた。

それは解っている。十分過ぎるほど理解しているのだ。自分の行為の結果が本当に人々の為になるのかどうか。しかしこれ以上彼女に何ができるだろうか？善なる軍神は力を与えても、彼女に進むべき道を指し示さない。

これが彼女にできる精一杯の、善なる軍神の御心になうだろうか力の使い方なのだ。

言い過ぎた事に気付いたリュイーズは詫びようと思いい口を開きかけた。

だが二人は喋りながら森の中に入ってしまったようだ。彼女はたちまち周囲に囲む人の気配に気付いた。

「案の定です。ご用意はいいですか？」

ポルメリアは無言で剣を抜いた。うなだれていようが落ち込んでいようが、彼女の体はすぐに戦闘体勢に入る。それが善なる軍神が彼女に与えた力の一つだ。感謝すべきなのに、時に厭わしい力の一つ。

そして臨戦態勢に入った彼女にリュイーズが囁いた。

「なるべく殺さないで下さい。お願いします」

言われてポルメリアは呆氣に取られた。まさかそんな言葉がリュイーズの口から出るとは思わなかったのだ。

彼女の囁きが終わるか終わらないうちに雄叫びとともに十数人の武装した男たちが森の中から現れた。

まだまだ森には何十人かの人の気配がある。ポルメリアにはリュイーズに尋ね返す余裕もなかった。

多勢に無勢とは言うものの、二人の娘にはあまり関係がなかった。

互いの背中をあずけて戦うのだが、殺さないように手加減するポルメリアはともかく、素手で立ち向かうリュイーズもまったく問題なく襲撃者たちを打ちのめしていった。

名のある騎士はいない。全て雑兵ばかりだ。しかし数が多い。

最初の十数人はあつという間に片がついた。それでも後から後から森より何人もの男たちが現れてくる。

ポルメリアには問題はなかった。

城一つ落とすだけの力がある彼女にとって、数を頼みに襲い掛かる雑兵の群れなど本気を出すまでもなかった。彼女が驚いたのは同じように息も切らせず戦い続けるリュイーズの事だった。

トリスの城内でポルメリアを狙って飛来する矢を捕まえ、

それどころか射手に投げ返して返し矢を見命中させている事からも並みの腕ではないと思つたが、重い鎧や武器を一つも身につけてすまないにも関わらず、

ポルメリアと並んで数十人の兵士を圧倒できるリュイーズには一騎当千の力があつた。

大方五十人も倒したところだろうか。ようやく少しは骨のありそうな騎士が現れた。名乗りはしない。不意打ちの暗殺にも等しい行為だ。名前を聞かせても名譽にはならない。

この襲撃隊の隊長のようだがポルメリアの見たところ大した事はなかつた。

何より部下に無造作に襲いかからせて相手が疲れたところを見計らつて出てくるなど、小賢しいばかりだ。それにポルメリアはまったく疲れていない。本気を出せば一太刀でこの男を粉碎する事もできた。

だがそれを察したのか、ポルメリアの前にはリュイーズがいた。

「お下がり下さい、ポルメリア卿。この者は私が倒します。彼を倒せば、この狂犬のような連中も怯んで退くでしょう」

騎士は小馬鹿にしたように唾を吐いた。流石のリュイーズもやや息があがつてきている。

それを見て馬鹿にしているようだ。だが小賢しい騎士の頭の中で素早く計算された事は確かだ。

ポルメリアはまったく平気な顔をしている。『城砦落し』を討ち取つたとなれば名が轟くだろうが、とてもではないが楽に勝たしてくれるとは思えない。

だがリュイーズを捕らえて人質にすれば、天使の眷属とも言われる少女騎士の動きを封じる事もできるだろう。彼はそう考えたのか、大きな戦斧を握り締めてリュイーズの前に立ちふさがつた。

ポルメリアはしばらく二人から目を放す事にした。残つた雑兵たちをなぎ倒した方が楽だと思つたからだ。

リュイーズの勝敗が気にならない訳ではなかつたが、例え彼女が負けたとしてもポルメリアにはそれを問題とする理由がなかつた。

彼女を人質に取つたならば、手加減無用で相手の騎士を殺すつもりだつた。

騎士がリュイーズにとどめを刺す前に相手を殺す自信がポルメリアにはあつた。

更に十人の雑兵を打ち倒した時だつただろうか。まだ数人残つていた兵士達からどよめきが起こつた。

振り返ると騎士は戦斧を手放し、両膝を着いていた。庇うように両腕で腹を抱え、前のめりになっている。

リュイーズは容赦なく回し蹴りで相手の横つ面を蹴り飛ばし、騎士はその後びくりとも動かなくなつてしまつた。

雑兵たちは踏み止まる事ができなかつた。残つたのは僅か数人だつたが、皆、算を乱して逃げ出していった。

後には六十人ばかりの気絶した男たちが倒れているばかりだ。

リュイーズはようやく一仕事終えたというように衣服の埃を払い、投げ出した荷物のところへ戻つた。そして事もなげに言うのだ。

「行きましょつ」

「・・・彼らはどうするのです」

「それぞれの運に任せればいいのです」

「これが貴女のいう『貸し』ですか」

「全てではありません。その他諸々の一つでしょう。フォリヴァスは広言しない。

ヤニースはもちろんです。だが両者はこの顛末を知っています。少なくともヤニースは知っている。

いかに自分の本拠につめている手勢がだらしないかという事が解りました。

そしてフォリヴァスは知りました。ヤニースは凶体ばかり大きくて中身がない」

リュイーズはおかしそうに話している。ポルメリアはやや眉をひそめた。彼女の口振りがどうも気に入らないのだ。

その日は宿場町まで日があるうちに辿り着けなかった。雑木林の中を走る道より少しはずれて、二人は野宿する事に決めた。上に大きな枝がかぶさっている窪地を選ぶ。火を焚いても煙が枝葉で薄れるだろうからだ。光が道から見えなければ、追っ手や野盗に悩まされずに夜を過ごせる。

簡素な食事を取ったあと、ポルメリアは再び尋ねた。

「貴女は、本気でムラード・ヤニース殺害犯を突き止めようとしているのですか？私には、ヤニース家の様子をこれ幸いと探りにきた密偵にしか見えない」

保存用の豆をつまみながら、リュイーズは意味ありげな笑みを浮かべた。

それは、この仕事に誇りと喜びを持つものの晴れやかな笑顔ではなかった。

こういう顔をポルメリアは何度か見た事がある。それは人を畏にはめようとする暗い笑みだった。

「私たちは一つの目的だけで動いたりしません。もちろんムラード・ヤニース殺害犯は見つけます。

そして同時にヤニースやハガートの内情を知るのも私の任務。貴女はヤニースの都城、

それも本拠であるトリスを見てどう思いましたか？」

「・・・あやうい・・・かな」

「ええ。私たちのような素性の知れない者を相手に二度の襲撃を失敗している。

内部では過去の栄光や自尊心ばかりが強いの幅を利かせている。

家宰のタイガス老にしたところで、トリスや広すぎる領国の維持に汲々としているばかりです。

軍勢の手際は別かも知れません。しかし、支配機構の中枢があれば、大した働きができないでしょう。

ヤニースは脅威にも頼りにもならない」

「暗殺犯の方はどうなのです？解った事は、相手の鮮やかな手並みと外部からの侵入が難しいという事だけですが」

「それだけ解ったなら大収穫ですよ。

これがムラード・ヤニースが殺害されただけならば、内部の継承争いという線があるが、続けてハガート当主が亡くなっています。偶然にしてはできすぎでしょう。あの見てくれ警戒厳重な城に潜入するのは骨ですが、

逆にあれだけの事をやってのけられる者は少ない。盗賊ギルドや暗殺者ギルドから当たれば、容疑者の絞込みは可能です」

「ではハガート家には向かわずにギルドと接触しますか？」

「そちらは別の者にしてもらいます。次に大きな街に着いたら手紙を出します。数日のうちに容疑者候補を割り出してくれますよ」

何というのか、フォリヴァス家は伊達に『宰相大公』を名乗っている訳ではないと解った。

ここまで整備された統治機構を持っている諸侯は他にはいないだろう。

領国の数こそ七カ国とヤニースに劣るものの、ヤニースの手際とリュイーズが属するフォリヴァスのそれとは雲泥の差だ。

溜め息とともにポルメリアは呟いた。

「貴女は本当に、私を『看板』扱っているのですね。平和の為と称しながら、その実、フォリヴァス家の覇権の為に動いている」

「実際それが平和への近道ではありませんか？」

リュイーズにはボルメリアの溜め息の意味が、彼女の自尊心ゆえと思えた。だがボルメリアはそれ以上にフォリヴァス家に肩入れしている自分に悩んでいた。

「貴女はそれで良いでしょう。しかし他の諸侯はどう思うだろう・・・。」

「屈辱を感じるでしょう。敗北感もね。しかし、それが何だというのです？ 私は話し合いによる平和なんて信じませんよ」

ボルメリアにもリュイーズがフォリヴァスの宰相大公に絶対的ともいえる忠誠心を持っている事は解る。だから彼女は、フォリヴァスに屈服する諸侯に対して冷淡でいられるのだろうか。

「・・・力による平和か」

疲れたようなボルメリアの呟き。だがリュイーズは蔑むように鼻で笑った。

「皆が平等な立場で話し合いをするのは理想でしょうよ。でも、それで何が決まるというのです？」

貴女は幼い頃から一人で、そして騎士となつてすぐに一人旅に出られた。

何でも貴女は一人で決めなければならなかった。だが裏を返せば、何でも一人で決められたのですよ。

私は別の世界を見ました。故郷の村は合議で物事を決めていた。大抵皆から信頼された長老や村長が主導権を握りましたよ。しかし私たちの村が二つの諸侯の境界線になつてしまった時、それは機能しなくなつた。

一方の諸侯より取立てを約束された者たちは、それまでの領主に忠実であろうとした長老や村長と対立した。

村長派は数が多い。だが反村長派は優れた武器を持っていた。両者の勢力は拮抗し、そして私の故郷は真つ二つに裂かれました。

二つの諸侯が私の村で戦火を交え、残つたものは廢墟だけです。それが私の故郷の『話し合い』の結果なんですよ」

ボルメリアは言葉を失い、顔を伏せた。苛立ちを侮蔑の笑みに隠したリュイーズは尚も話を続けた。

「七人の大公が天使なき後のこの『王国』を主導してきました。

しかし結果はどうです？ 南部のオウルバイン、東部のウォレンサーはもちろん、赤き巨龍に荒らされた西部も、絶えず蛮族や魔物と戦い続ける北部も七大公の意向など無視している。

中原の中ですら、七人の大公は大きく二つに分かれ、そしてその二つの派閥の中でさえ争っている。

今まで他の諸侯を圧倒するだけの強大な者がいなかったからですよ。

自分と同列の者、自分を物理的に脅かす存在でない者の言う事を誰が聞きますか？

我が宰相大公閣下はご自分が何をすべきか、どうすればこの『天使王国』を治める事ができるのか、よくよく考え、そして実行しておられる。

それが実現した時こそ、『平和』が訪れる。そうは思いませんか？」

貴女のように、ただ悪しき者を殺すだけではどうにもならないのだ、とリュイーズは言っているようだ。

「解つてはいるのです。私がやっている事は、子供の思いつきのようなもので、本当に人々の為になっているのではないのだと。

けれども・・・解らない。私には政は解りません。私は善なる軍神に力を授けられた兵士に過ぎない。

しかし神の教えは何処にもなく・・・貴女の言う事は、確かに正しいのでしょうか」

顔を伏せ、囁くように呟いていたポルメリアだったが、やがて顔をあげた。その深い青い瞳が逆にリュイーズに問い掛けているようだ。

「しかし、フォリヴァス家の野心の影で、自分のささやかな生活を踏みにじられる人々がいるでしょう？ 私、そういう人たちの助けになりたいのです」

望んでいる事は同じだ。しかし二人の視点はまったく異なっていた。

故郷を滅ぼされた平民出身のリュイーズは尊敬し信頼すべきフォリヴァスの宰相大公に巡りあい、大局からの視点でいかにして『平和』を実現するかを語っている。

諸侯の娘として生まれながらポルメリアは逆に底辺ばかりを見ていた。

誰が支配者になるうとも人々は明日の糧を得る為に必死で生きている。

諸侯同士には小競り合いに過ぎない戦いでも戦場となった村は荒廢する。

農地は荒らされ、家々は焼かれ、人や家畜は奪われていく。

どんな大義名分を唱えようとも戦いになれば民衆を襲う災厄は変わらないのだ。

ポルメリアはそれを見過す事ができなかった。

リュイーズは肩をすくめた。望むものは同じでありながら、彼女とは解り合えないだろう。そう思ったのかも知れない。

「常に弱者を守る立場に立ち、どんな諸侯にも組さない貴女を担ぎ出してヤニースの城に潜入した事は認めましょう。平民出身の私の特使としてやってきても門前払いされるのが落ちでしょうからね。」

確かに私は貴女を利用しました。その事にご不満があるならば、ここで袂を分かつのもやむを得ないですね」

平和を望むリュイーズの言葉に嘘はないだろう。

だが彼女の平和とはフォリヴァス家が覇権を握る事によって得られる平和なのだ。

フォリヴァスに対抗しようとする諸侯がいるならば、血が流れる事は避けられない。

しかし、このまま暗殺犯が判明しなかったらどうなるだろう？

「一つ質問してもいいですか？」

「はいね」

「二連の暗殺犯が結局判明しなかった場合、どうなると思います？」

「戦争ですね。ハガートは間違いなく後継者争いで揺れています。」

ヤニースは反フォリヴァス色を鮮明にしてオウルバインと提携するでしょう。

つりあいを取る為にフォリヴァスはウォレンサーとの同盟も視野に入れなければならなくなる。

最悪の事態を考えれば、中原を中心に東部も南部も戦乱の渦に巻き込まれるでしょう」

そんな事は自明ではないか。リュイーズは改めて尋ねるポルメリアに素気ない態度で答えた。

彼女は青い瞳を伏せた。そして数度の瞬きの後に顔を上げた。

「私はこのまま貴女とともにハガート家の居城へ行きます。」

貴女は無用の戦いを避けようとしているのでしょうか？では私はこのまま貴女と一緒に旅をしましょう。戦の炎が野を焦がさぬ為に」

「それはありがたいことです。しかし暗殺者が判明し捕らえたとしても、やっぱり戦いは起こるかも知れませんが」

「そうなったなら、仕方のないこと。私は私の取るべき道を進むだけです」

「・・・戦を止めるつもりですか？」

「そこまで自惚れてはいません。私にできる事は、私の腕が届く範囲の人々を守ること。その相手が誰であろうと」

その言葉を聞いてふとリュウイーズは、その誰かが自分ではないかと思えた。

「ヤニースであろうと、ハガートであろうと、そしてフォリヴァスであろうと、ですか」

リュウイーズの言葉にポルメリアは答えなかった。だが青い瞳には何の動揺も見られない。呆れたものだった。

「そんな事したら、貴女は世界を相手に戦う事になるかも知れませんか？」

「そんな事は、始めから解っていた事です」

ポルメリアのその言葉が酷く透明感に満ちていて、リュウイーズは戸惑いを感じた。

次に彼女が本気でそう言っていると理解して愕然とした。

彼女は初めから勝利など得られないと解っていて戦っているのだ。

「・・・貴女は、何を言っているのです？」

「私は善なる軍神の使徒です。生れ落ちてからすぐにそう定められて、父であるランキン侯にお会いした事ありません。

軍神は私に人の身としてはありあまる力を授けられた。だが、この力を何の為に使うべきなのか教えてはくれませんが。

ならば私は、私が定めた誓いの下に力を使うしかない。悪を滅ぼし、弱き者の為に戦う。

それが何者であろうと、私は力なき人々の為に剣を取らなければならない。そう決めているのです。それが私の進む道なのです」

だがそれは孤独な茨道だ。

弱き人々は領主に支配されている。彼らの支配がよろしければいいのだろうが、現実には善政を敷く事のできる領主は限られている。

相手が何者であろうと、例えば自分の父親が支配するランキン侯領であろうとも苦しみ悶える者がいるならば、彼女は剣を振るのだ。

皆が皆幸せに暮らせるなんて幻想だ。世界には天災、疫病、戦争、魔物が満ちている。

それら全てを、いかに天使の眷族とはいえポルメリア一人で解決できる筈がない。

剣を振るだけしか能のない彼女にできる筈がない。

その事を彼女自身が絶望的なまでに知っている。それでもポルメリアは剣を取って戦うのだろう。愚かしいほど律儀に。

リュウイーズは初めてポルメリアを哀れだと感じた。

彼女が忠誠を誓う善なる軍神は決して答ええない。神に授けられた力を、彼女は不器用に使い続けるしかないのだ。

生真面目な彼女には他の道など思いつかないのだろう。

「承知しました。それで結構です。立場は異なれども私たちが戦いを望んでいない事には変わりないはず。」

互いの道が別れるまで、ご同道願います」

リュイーズはもはやボルメリアを蔑んだりしなかった。ただひたむきに孤独で絶望的な道を歩こうとする彼女を哀れんだ。そして忠誠を誓うにたる主人を見つけ、その覇道に殉じる事のできる自分の身の上に満足した。

焚き火からあがった赤く照らされた煙は、枝に散らされて夜の空に消えた。闇が沈黙とともに降りてくる。

それぞれの生き様を噛み締めていたので、二人はもう何も言わなかった。

夜が更ける。何処かで虫の音が聞こえる。虫の音だけが辺りに満ちていた。

しかし、このまま暗殺犯が判明しなかったらどうなるだろう？

「一つ質問してもいいですか？」

「どうぞ」

「一連の暗殺犯が結局判明しなかった場合、どうなると思います？」

「戦争ですね。ハガートは間違いなく後継者争いで揺れています。

ヤニースは反フォリヴァス色を鮮明にしてオウルバインと提携するでしょう。

つりあいを取る為にフォリヴァスはウォレンサーとの同盟も視野に入れなければなくなる。

最悪の事態を考えれば、中原を中心に東部も南部も戦乱の渦に巻き込まれるでしょう」

そんな事は自明ではないか。リュイーズは改めて尋ねるボルメリアに素気ない態度で答えた。

彼女は青い瞳を伏せた。そして数度の瞬きの後に顔を上げた。

「私はこのまま貴女とともにハガート家の居城へ行きます。

貴女は無用の戦いを避けようとしているのでしょうか？では私はこのまま貴女と一緒に旅をしましょう。戦の炎が野を焦がさぬ為に」

「それはありがたいことです。しかし暗殺者が判明し捕らえたとしても、やっぱり戦いは起こるかも知れませんか？」

「そうだったなら、仕方のないこと。私は私の取るべき道を進むだけです」

「・・・戦を止めるつもりですか？」

「そこまで自惚れてはいません。私にできる事は、私の腕が届く範囲の人々を守ること。その相手が誰であろうと」

その言葉を聞いてふとリュイーズは、その誰かが自分ではないかと思えた。

「ヤニースであろうと、ハガートであろうと、そしてフォリヴァスであろうと、ですか」

リュイーズの言葉にボルメリアは答えなかった。だが青い瞳には何の動揺も見られない。呆れたものだった。

「そんな事したら、貴女は世界を相手に戦う事になるかも知れませんか？」

「そんな事は、始めから解っていた事です」

ポルメリアのその言葉が酷く透明感に満ちていて、リュイーズは戸惑いを感じた。次に彼女が本気でそう言っていると理解して愕然とした。

彼女は初めから勝利など得られないと解っていて戦っているのだ。

「……貴女は、何を言っているのです?」

「私は善なる軍神の使徒です。生れ落ちてからすぐにそう定められて、父であるランキン侯にお会いした事ありません。軍神は私に人の身としてはありあまる力を授けられた。だが、この力を何の為に使うべきなのか教えてはくれません。ならば私は、私が定めた誓いの下に力を使おうとしない。悪を滅ぼし、弱者の為に戦う。」

それが何者であろうと、私は力なき人々の為に剣を取らなければならない。そう決めているのです。それが私の進む道なのです」
だがそれは孤独な茨道だ。

弱き人々は領主に支配されている。彼らの支配がよろしければいいのだろうが、現実には善政を敷く事のできる領主は限られている。相手が何者であろうと、例え自分の父親が支配するランキン侯領であろうとも苦しみ悶える者がいるならば、彼女は剣を振るのだ。

皆が皆幸せに暮らせるなんて幻想だ。世界には天災、疫病、戦争、魔物が満ちている。

それら全てを、いかに天使の眷族とはいえポルメリア一人で解決できる筈がない。剣を振るだけしか能のない彼女にできる筈がない。

その事を彼女自身が絶望的なまでに知っている。それでもポルメリアは剣を取って戦うのだろう。愚かしいほど律儀に。

リュイーズは初めてポルメリアを哀れだと感じた。

彼女が忠誠を誓う善なる軍神は決して答えない。神に授けられた力を、彼女は不器用に使い続けるしかないのだ。生真面目な彼女には他の道など思いつかないのだろう。

「承知しました。それで結構です。立場は異なれども私たちが戦いを望んでいない事には変わりないはず。互いの道が別れるまで、ご同道願います」

リュイーズはもはやポルメリアを蔑んだりしなかった。ただひたむきに孤独で絶望的な道を歩こうとする彼女を哀れんだ。そして忠誠を誓うにたる主人を見つけ、その覇道に殉じる事のできる自分の身の上に満足した。

焚き火からあがった赤く照らされた煙は、枝に散らされて夜の空に消えた。闇が沈黙とともに降りてくる。

それぞれの生き様を噛み締めていたので、二人はもう何も言わなかった。

夜が更ける。何処かで虫の音が聞こえる。虫の音だけが辺りに満ちていた。